優秀賞

わたしとカメ

日本大学 3年　山本 咲渚

「わたし、亀の仲間よ！だってみずがめ座だもん」

一月生まれの彼女は心から信じてやまない真実を家族に打ち明けた。が、二秒後には彼女の顔は亀の甲羅とは正反対の色に染められることになったのだ。さらには、笑い交じりにみずがめ座っていうのはね、甕のことで亀とは違うんだ。と言われてしまう。

お気づきだろうが一月生まれの彼女とは私のことで、この話は私が二十歳になった現在も家族の中で受け継がれる伝統的な話となってしまっている。どういうことか、当時生まれて間もなかった妹にまで鮮明な印象を植え付けているのだから相当だ。

亀に関するエピソードは蓋をしきれないほどたくさんあり、当時亀が好きで動物園で自分より大きな亀の口元に手を差し出し食べられそうになり、普段温和な両親を叫ばせたこともあった。

不思議なことにカメと縁がある私。そしてここまでカメに感情を振り回される私の家族。これらを踏まえて私が学ぶべきことはたった一つ。

「カメに気をつけろ」

これしかないだろう。

文字や言葉にはとらえ方によっていくつもの変形が可能であり、日本語には同じ発音の言葉が多く存在する。それでも私たちは日々の生活の中で正確に言葉を伝え、理解する必要がある。それがどれほど難しく、楽しいものなのか多くの人に知ってもらいたい。コミニケーションをとることでしか作ることのできない思い出や感じることのできない人間味を幼少時代に経験したことで、人と関わり合う毎日が、人生が、最高に楽しい。

あと半年で二十歳が終わり、二十一歳になる。これを機会に家族に誕生日プレゼントを頼んでみることにしよう。水槽と石と草、そしてカメを。